



人類に
奉仕する
ロータリー

RIのテーマ

「人類に奉仕するロータリー」

ROTARY SERVING HUMANITY



ロータリーの心を学ぶ

ガバナー 富田 英壽

ロータリーに入ったら、3つの課題があるとある先輩ロータリアンが言っております。それはこの3つであります。

1. ロータリーの真の意味の理解ができているであろうか (ロータリーの心、理念を理解しているか)
2. 現在のロータリー活動状況を理解しているであろうか
3. ロータリーはこのままでよいのだろうか

そこで、1番の「ロータリーの真の意味、すなわち「ロータリーの心、理念」を理解出来ているであろうか」という問題を考えてみようと思います。

今、ロータリアンは、ロータリーの心、理念というものをしっかり理解している必要があると言われてます。それはどうしてかと言いますと、時代が変わり、そしてロータリーが変わってきているからです。

ロータリーの心や、理念をしっかりと理解していないと、変化に戸惑うことになり、ロータリーが大事にしてきた基本というものを、見失ってしまいそうになるからです。いくら時代が変わってもロータリーが大事にしてきたものは失ってはいけません。変えて良いものと変えてはいけないものがあるということです。

さて、どのようにロータリーが変わって来ているかと申しますと、1つは、RIの考え方が、人道的奉仕への傾注のため、資金を多く集めたいためでしょうか、会員増強に一所懸命になっているように思います。その証しに、あれほど長い間守ってきた、そしてロータリーの特徴でもあった「1業種1会員制」がくずれてきました。この「1業種1会員制」は、長い間ロータリーの大原則になっておりました。

もともと、ポール・ハリス自身の思索の中から生まれ出たものであります。職業人が、資本主義社会の自由競争のもと、互い相競うなかで、親睦、和合を達成させるということは、どのようにしたら可能であるか。この難問を見事に解決したのが、1つの職種から、1人しか会員を採らないという発想であります。そうすれば、同業者がいないので、疑心暗鬼の気持ちに陥ることなく、親睦、和合が達成されるというわけであります。このようにして、「1業種1会員制」の原則は、あらゆるロータリーの原則のうち、最近まで、その大原則をなしてきたのであります。

しかし、この大原則が、約十数年前(2001年)に打ち破られました。その理由として、ロータリアンの高齢化、会員の若返りをはかるためであったのか、単なる会員増強のためか、また、1人より多数の会員がいた方が職業を通じてのサービスが、より有効に行われるからというのか、その理由は明らかにされていないようです。しかし、この「1業種1会員制」の大原則は、是非、守られていくべきであるとする意見も、多く聞かれるところであります。

また、Eクラブ、すなわちインターネットクラブなるものが考え出されましたが、これも会員を少しでも増やそうとするためでしょうか。例会で顔を合わせないで、Fellowship(親睦・友情)を深められるのでしょうか。Face to Faceの例会出席が、基本中の基本でしたが、これも崩れてきました。

また、今まで大切にしてきた、職業サービスが軽視され、慈善奉仕活動に、重きが置かれて来ているのにも気になります。その証拠に、決議23-34号を「手続き要覧」から削除しようと、RIで図られたことがありました。幸い日本のRI理事さん方の懸命な努力で削除は免れたそうです。

今、世界的に会員減少の中、会員を増強することによって資金を増やし、ロータリーの活動費を多くして行く必要があるとは考えます。ポリオプラスを初め、世界社会奉仕、青少年奉仕と多くの資金が必要です。とはいえ、誰でも彼でも入会させていく訳にはいきません。ロータリーの誇りと魅力が失われていきそうです。メンバーの質の面からも、「入りたいロータリークラブ」、「入れてもらいたいロータリークラブ」にしていきたいものです。

ロータリーが変わってきている2つめの原因は、時代そのものが変わってきているからです。1つは経済環境の悪化、不況でしょう。2つは経済構造の変化であります。大規模小売業の台頭や製造業の空洞化など経済活動の変化です。3つめはITなどの新産業が出てきたことでしょう。よく言われるのは、IT関係をはじめ多くの仕事がグローバル化して、世界を飛び回って仕事をする若い人たちが多くなって、現状のようなロータリーの例会に出席するような時間的余裕がないというわけで、Eクラブも考えられたようです。これ

らの時代の変化によって、ロータリーの会員減少が起きているようです。

少し横道に入りますが、例のEクラブを訪問しました。そのクラブは日本ロータリーEクラブ2650というインターネットクラブで、福井、滋賀、京都、奈良の2650地区にあります。例会は毎週月曜12時から次週の月曜日12時までの1週間、毎日24時間開かれている訳です。「会長の時間」「幹事報告」「委員会報告」があり、「卓話」は動画で30分開かれています。メイキャップをしましたが、当時は10月の米山と職業奉仕強調月間でありましたから、それらのことに説明があった上で設問が提示されており、その設問に自分のコメントを300字から1000字以内で書き込むようになっています。コメントを送信し、メイキャップ料金500円をクレジットカードで入金すると、直ちにメールで「貴クラブ会員出席報告」が返信されてきます。それをプリントして自分のクラブに提出しメイキャップとなります。とはいえ「サインだけのメイキャップ」よりは、少し意味があるように思えました。

このような時代に対応したロータリーにもしていかなければなりません。ポール・ハリスも「この世界は絶えず変化している。だから我々は世界と共に変化することに用意しなければならない」と云っています。時代にあった、多様化したロータリーが必要になってきます。しかし、ロータリーの心、理念は大事にして行かなければならないと思います。

さて、ロータリーの心を学ぶには、先輩ロータリアンから話を聞いて学んでいくことや色々なセミナーで学んでいくことは勿論ですが、書物からも学ぶことができそうです。多くの先輩ロータリアンが推奨しておりますのは、ポール・ハリスが書いた「THIS ROTARIAN AGE」という本です。日本のロータリーの祖であります米山梅吉氏が、それを翻訳して『ロータリーの理想と友愛』と題して、約80数年前に、三省堂から出版しています。その頃、RI事務総長を永くしていた、チェスレー・ペリーがこの本の序文を書いておられますが、それを見ますとこのようになります。

「もし、ある人がロータリアンとなって、未だ、ロータリーにより十分なる人間性を、感受し得ざる不満足を懐くとすれば、本書を一読して、明快にその不満足を一掃するであろう。あるいは、ロータリー運動をもって、参加に値するほど重要ならずと感じ、これに興味を失わんとするロータリアンありとすれば、その誤られる認識は、本書によって、直ちに是正されるだろう」とあります。なんと力強い推奨の言葉であります。

基本に戻って、魅力あるロータリーに

この本は、ロータリーの創始者ポール・ハリスが、ロータリーが出来て30年後に、自分で書いた本であります。どういふ思いで、ロータリーを創ったのか、その後、自分たちだけのためではいけないことに気がつき、人の役に立つことをしなければ「サービスの概念」が生まれてくるわけです。そのサービスについていろいろの思想対立の中、どう変化して現在のようなものになってきたのか、将来のロータリーのめざすものは何か、またロータリーの可能性はどんなものがあるのだろうかなどのポール・ハリスの思索が読み取れます。ですので、このような本からも「ロータリーの心」というものを感じ取って、よく理解していく必要があると思います。

さて、「ロータリーの心」とはどんなものか考えてみましょう。ロータリーの根本は、Fellowship(親睦・友情)とService(サービス)の2つであります。

サービスは一般に「奉仕」と訳されていますが、私はサービスという言葉を使いたいです。奉仕という言葉は、お上につかえると意味があり、人の役に立つ意味のサービスを使いたいです。米山梅吉氏も「奉仕」を使わず、サービスで通しています。

ロータリーの心とは、このFellowshipの心とServiceの心を大切にすることであろうと思います。その根底に寛容、思いやり、親切、謙虚というものを大事にするということでありましょう。Fellowshipの心を大切にすることは、例会を大事にするということでもあります。異業種交流の中で友情を深め、自分自身を高めていきます。

もう一つの根本でありますServiceの心を大切にすることは、「人を思いやり、人の役に立つこと」であります。ポール・ハリスは、親睦、友達づくり、助け合いを目的にロータリーを創設し、その後、利己的な目的だけではないかと、サービス、すなわち「人を思いやり、人の役に立つように」しなければいけないとサービスの概念が入ってきます。その後、社会サービスか職業サービスか個人サービスか団体サービスかの思想の対立が起こり、あの決議23-34号となるわけです。この決議でロータリーの奉仕哲学が規定され、利己と利他との調和をどのように取っていくかに奉仕の哲学がおかれましました。利己と利他との調和を考えて行動しなければならないというわけです。「Service Above Self」(超我の奉仕)(サービス第1、自己第2)という奉仕理念が定められ、「最もよくサービスする者、最も多く報いられる」が実施理念とされたのであります。

ですので「サービスの心」を大切にすることは、「Service Above Self」と「One Profits Most Who Serves Best」の、2つのロータリーのサービス理念を、



RIのテーマ

「人類に奉仕するロータリー」

ROTARY SERVING HUMANITY

大事にしていくことでありましょう。ロータリーはどんなに時代が変わっても、「決議23-34号」の世界を逸脱することは許されないのではないのでしょうか。

ところで、二宮金次郎(1787~1856)という名前は、今でも全国各地の小学校の校庭に残っている銅像(薪を背負って本を読む、あの可憐な少年の像)によって良く知られていますが、大人になったあとの金次郎のことは残念なことに余り知られていないのが実情です。大人になったあとの金次郎(尊徳)こそ偉大な思想家、哲学者であります。

後世の渋沢栄一、安川善次郎、後藤新平、御木本幸吉、本多静六、豊田左吉、石橋湛山、松下幸之助、土光敏夫、福沢諭吉、内村鑑三、志賀直哉、武者小路実篤などのみなさんに二宮尊徳の報徳思想は大きな影響を与えています。そしてロータリー以前の大ロータリアンといわれる二宮尊徳は、このように云っております。

「自分の利益ばかり考えている者は、風呂のお湯を、しきりと手前へかき寄せているのと同じです。一時は自分の方へお湯が寄ってくるが、すぐに脇をすり抜けて向こう側へ流れて行ってしまふ。自分も恵まれることがないのです。

これと反対に、常に相手のために思い、自分の持っているものを与えようとする人は、お湯を向こう側へ押しやるのと同じです。そのお湯は向こうへ行くようにみえますが、実際には、グルッと回って自分の方へ返ってきます。相手も喜び、自分も恵まれることになるのです」

すなわち、利他の精神が大事であると云っており「奪うに益無く、譲るに徳あり」という言葉を残しています。

最後に、思いやりについて、「美味しいよ」という話をして終わりたいと思います。

第2次大戦の終戦のころの話です。

昭和20年8月、日ソ不可侵条約を、一方的に破棄したソ連軍は、ソ連国境を越え、満州になだれ込んできました。そして終戦になりました。

知り合いの堀川さんの部隊は、シベリアに連行され、奴隷のように扱われました。多くの戦友が、寒い寒い酷寒の地で望郷の念を抱きながら死んでいったが、堀川さんは、幸いにして帰国する日が巡ってきました。引き揚げ船の上から、祖国の山々が見えたときには、誰も涙もなく、涙が流れ、それを抑えることが出来なかったと言います。

夫の帰りを、知らされた夫人は、どれほど嬉しかったのでしょうか。早速、夫を迎える準備にとりかかったのは勿論であります。抑留中の苦勞を慰めるためにも、美味しいものを作って食べさせようと思ったのは、妻としては、当然のことです。

ところが、当時は、日本中が食うや食わずの生活状態でありました。夫人は、この日のために少々の米は蓄えていました。野菜は駆けずり回って手に入れることが出来ましたが、肝心の酒がない。何日もかけずり回っても、酒はどうとう手に入れることが出来ませんでした。

そこへ、懐かしい夫が帰ってきました。

生きて帰ってきた夫と家を守ってきた妻が、手を取り合っただけ喜び、お互いの苦勞をいたわり合ったことは言うまでもありません。

何はともあれ、久しぶりに夫婦差し向かいで、食事することになりました。夫人は仕方なしに、お鮎子に「おき湯」を入れて持参し、夫の杯に、鮎子の「おき湯」をついでやりました。夫は、嬉しそうに、それを口に運んでゴクリと飲んだ。

酌をするということは、酒をつぐことに決まっています。夫人は夫をだましている気がして思わず顔を伏せました。

その時、「美味しいよ」と、夫の口から発せられた言葉に、夫人は耳を疑った。

はっと、夫の顔を見た時、夫の両目から涙があふれていた。夫人の目からも堰を切ったように涙が止めどもなく流れ落ちた。

「美味しいよ」と、言葉は短かったが、堀川さんの万感を込めた、夫人への思いやりと、感謝の気持ちが込められていました…。

【引用文献:彦田信義「美味しいよ」『心に残るとっておきの話』潮文社、1994年】

これは堀川さん夫婦の間の思いやりの話ではありますが、このようなやさしい「思いやり」が家族、友人、職場、地域社会、国家間にも広がっていったら、この世も、もっと幸せで、平和なものになっていけるのではないのでしょうか。

このような思いやりを大事にし、人の役に立つことを実践していくのが「ロータリーの心」だと思います。(以上)